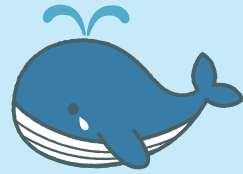


# SDGs アクションブック



# かながわ カーナビ



発行 神奈川県

Sustainable Development Goals = SDGs (エス・ディー・ジョーズ) は2015年9月にすべての国連加盟国が全会一致で採択した、2030年までの「持続可能な開発目標」です。17個の目標(ゴール)、169個のターゲット、232個の指標から成り立っています。気候変動の激化、貧富の格差拡大、紛争の増加など、このままでは、この美しい地球を次の世代に引き継いでいけないという強い危機感から生まれました。

神奈川県は2018年に内閣府が推進する「SDGs未来都市」および「自治体SDGsモデル事業」に選ばれ、SDGs達成に貢献するさまざまな政策を積極的に実施しています。本冊子もその一環で制作されました。読者のみなさんがSDGsを自分ごととしてとらえ、未来をよりよい世界にするための、自分なりのアクションを見つけるきっかけとなれば幸いです。

169のターゲット、  
232の指標はこちらから  
[SDGs for School]



# SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

<p><b>1</b> 貧困をなくそう</p>	<p><b>2</b> 飢餓をゼロに</p>	<p><b>3</b> すべての人に健康と福祉を</p>	<p><b>4</b> 質の高い教育をみんなに</p>	<p><b>5</b> ジェンダー平等を実現しよう</p>	<p><b>6</b> 安全な水とトイレを世界中に</p>
<p><b>7</b> エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p>	<p><b>8</b> 働きがいも経済成長も</p>	<p><b>9</b> 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>	<p><b>10</b> 人や国の不平等をなくそう</p>	<p><b>11</b> 住み続けられるまちづくりを</p>	<p><b>12</b> つくる責任 つかう責任</p>
<p><b>13</b> 気候変動に具体的な対策を</p>	<p><b>14</b> 海の豊かさを守ろう</p>	<p><b>15</b> 陸の豊かさも守ろう</p>	<p><b>16</b> 平和と公正をすべての人に</p>	<p><b>17</b> パートナーシップで目標を達成しよう</p>	<p><b>SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS</b></p> <p>2030年に向けて 世界が合意した 「持続可能な開発目標」です</p>

**SDGs  
アクションブック  
かながわ**

発行 神奈川県

## 目次

「SDGs未来都市」神奈川県取り組み	3
SDGsアクション in かながわ	8
1 貧困をなくそう 生活協同組合ユーコープ	10
2 飢餓をゼロに よこすかなかながや	12
3 すべての人に健康と福祉を 湯河原リトリート ご縁の杜	14
4 質の高い教育をみんなに フリースペースたまりば	16
5 ジェンダー平等を実現しよう 富士屋ホテル	18
6 安全な水とトイレを世界中に WOTA シャワーパッケージ	20
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 湘南電力	22
8 働きがいも経済成長も 農スクール	24
9 産業と技術革新の基盤をつくろう 湘南ロボケアセンター	26
10 人や国の不平等をなくそう アール・ド・ヴィーヴル	28
11 住み続けられるまちづくりを 横浜若葉台団地	30
12 つくる責任 つかう責任 日本フードエコロジーセンター	32
13 気候変動に具体的な行動を 川崎キングスカイフロント 東急REI ホテル	34
14 海の豊かさを守ろう 真鶴魚つき保安林	36
15 陸の豊かさを守ろう あざおね社中	38
16 平和と公正をすべての人に 国際平和映像祭	40
17 パートナリシップで目標を達成しよう SDGs未来都市	42
中高生によるSDGsアクション・レポート	44
① 大川印刷 神奈川県立有馬高等学校	46
② 面仏法人カヤック 横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校	50
③ 湘南食育ラボ 湘南学園中学校高等学校	54
もっと学びたい人へ	
おすすめの本、ウェブサイト	58

## 「SDGs未来都市」神奈川県取り組み

# すべての人の「スマイル」につながるために

神奈川県に暮らす人は900万人以上。たくさんの人が生活し、働き、学んでいます。みんなが元気に暮らせる社会を実現するために、神奈川県が掲げるスローガンが、100歳になっても健康で、生きがいと笑顔にあふれる「スマイル100歳社会」です。

その実現のためにつくられた総合計画が「いのち輝く神奈川」です。みなさんも下にあるマークをどこかで見たことがあるでしょう。県民の命を輝かせるために、医療、環境、エネルギー、農業、食をはじめすべてを安全で、持続可能な形にしていくための計画です。

これ、何かに似ていると思いませんか？「いのち輝く神奈川」の理念は、SDGsと同じ方を向いているのです。



2012年に提唱された神奈川県の基本理念「いのち輝く神奈川」の10の項目はSDGsの項目と共通している

## SDGsとともに新しい事業を育む

みんなが安心して、安全で持続可能な生活を実現するためには、行政だけががんばっても足りません。民間企業、NPO、学校や住民のみなさんと連携して取り組むことが必要です。ではどうすれば、私たちは連携できるのでしょうか？ みなさんは「ESG投資」という言葉を聞いたことがありますか？

ESGはEnvironment（環境）、Social（社会）、Governance（企業統治）の略で、環境や社会に対して、倫理的で持続可能な事業を行っている会社に投資することです。SDGsの理念の普及とともに、銀行のお金の貸し方などにも変化が訪れるでしょう。私たちはこの変化に対応していかなければなりません。

そこで神奈川県は、「SDGs社会的インパクト評価実証プロジェクト」というプランを考えました。インパクトとは、社会的な効果・変化を指します。

SDGsの17個のゴールを目指している事業は、世の中にたくさんあります。しかし、それが本当にSDGsの実現に効果があるのかどうか？

環境・社会にマイナスの影響が生じていないかどうか？ また、持続可能な取り組みなのかどうか？ こうした「社会的インパクト」を客観的に評価することで「見える化」し、社会的投資につないでいくことが、このプロジェクトの目的です。

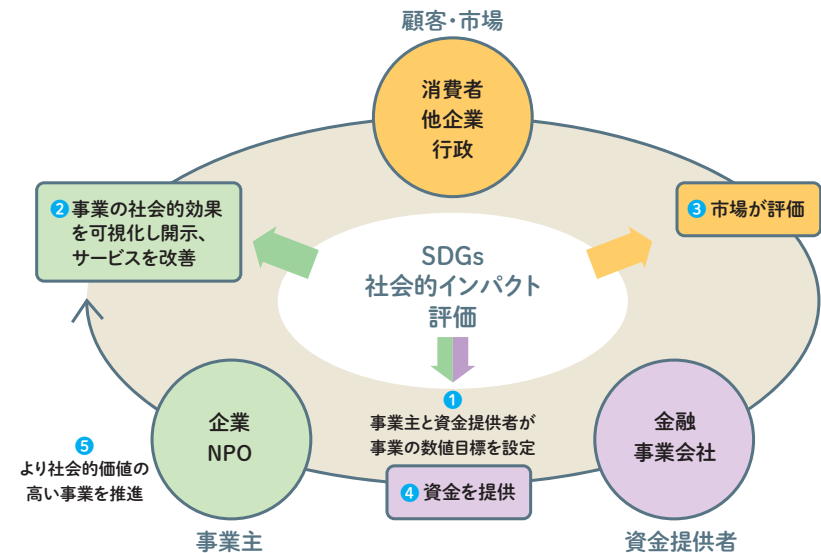
社会的インパクトの客観的な評価、それは成績表のようなものです。事業主にとっては事業計画を立てるときに参考になるでしょうし、消費者や市場にも影響を与えます。そして、銀行や信用金庫などの金融機関にとっても、この評価はとても重要な情報になります。

ESG投資につながる「SDGs社会的インパクト評価実証プロジェクト」は、政府の「自治体SDGsモデル事業」に選ばれました(p42参照)。

将来、この社会的インパクト評価システム(下図)が、“神奈川県モデル”として全国に波及し、SDGsの達成に貢献する事業を後押しすることを期待しています。

実証プロジェクトはもう始まっています。藤沢市のFSST(Fujisawa サステナブル・スマートタウン)という街で、「地域住民が担い手となる、多世代連携の互助によるコミュニティ・ケアの実現」をテーマに、実証実験が行われています。

SDGs社会的インパクト評価システム概要図



このシステムによって、①「SDGs社会インパクト評価軸」をもとに、事業主と資金提供者が、事業の数値目標を設定する ②事業主が、評価軸をもとに事業の自己評価を行う。評価を外部に開示するとともに、事業の改善に活用する ③評価と事業改善の情報開示が、顧客行動や市場動向に影響を与える ④資金提供者が市場動向をもとに出資を判断する ⑤市場での売上増や提供された資金により、より社会的な評価と価値が高い事業を持続的に推進できるという循環が生まれる

## 一人ひとりの「自分ごと」を見つけてほしい

大事なことは、行政も企業もみなさん一人ひとりも、SDGsをどう「自分ごと」としてとらえ、取り組めるかだと思います。

前述の「SDGs社会的インパクト評価実証プロジェクト」も、決して企業や金融家のためだけの計画ではありません。たとえば、FSSTでは、地域住民が協力してシニア世代を介護するコミュニティ・ケア事業のモデル、IoTなど最新ITを活用した高齢者向け住宅のモデル、住民参加によるシェアリングサービスのモデルが住民の生活を通して検証されています。そのためには、住民との連携が必要です。自治体、企業やNPO（事業者）、学校、住民が連携していくためのしくみづくりも、これからどんどん進めていく必要があるでしょう。

SDGs未来都市の神奈川県は、同時に選定された横浜市、鎌倉市をはじめ全国の自治体と連携して、2019年1月に「SDGs全国フォーラム2019」を開催しました。当日は日本中から1,215名もの人が集まって、これからの世界のあり方をみなで考えました。ここで、私たちは、自治体・地域発の「SDGs日本モデル」宣言(巻末参照)を発表しました。「SDGs日本モデル」宣言では、持続可能な地域づくりに向けて、行政と民間企業、NPO、学校や住民のみなさんとのパートナーシップを深め、日本のSDGsモデルを世界に発信していくこととしています。当日の宣言は、片山内閣府特命担当大臣や阿部外務副大臣が立ち会い、93自治体から賛同を得て、採択されました。この「SDGs日本モデル」宣言の実現に向けて、パートナーシップを大切にしながら取り組んでいます。

SDGsは海の向こうの話でも、遠い将来の話でもありません。この冊子で、私がみなさんに一番知っていただきたいのは、SDGsの取り組みは、みなさんの身近なところでも行われているということ。一人ひとりの生活のなかに、今日からできることが、実はたくさんあるというこ

とです。ぜひ、それを見つけてほしいと思います。

たとえば、神奈川県のSDGs事業の重点テーマに「マイクロプラスチック問題への対応」があります。これは、プラスチック製品の利用を減らし、海洋に流れるプラゴミを減らそうという事業です。SDGsゴールの14（海の豊かさを守ろう）と12（つくる責任、つかう責任）につながります。このゴール達成のために、あなたにできることがきっとあるはずですよ。

2030年。みなさんは何歳でしょう。社会に出て働いているかもしれません。新しい家族がいるかもしれません。あなたはどんな所でどんな暮らしをしたいですか？ どんな仕事に就いていたいですか？ どんな社会を次世代に残したいですか？

ゴールの期限が決まっていますから、そこから逆算する必要があります。2030年にSDGsを達成するためにはいま、何をすべきか。神奈川県も逆算の発想で、政策を考え、実施していきます。

最後に、私たちのゴールは「スマイル」です。人と人、笑顔が連鎖していく社会です。2030年は遠いようで近いです。一緒に考えていきましょう。それがSDGs達成への一歩です。

山口健太郎（神奈川県いのち・SDGs 担当理事）



2018年夏、鎌倉市由比ガ浜海岸に打ち上げられたシロナガスクジラの赤ちゃんの胃の中からプラスチックごみが発見されたことを「クジラからのメッセージ」として受け止め、同年冬に「かながわプラごみゼロ宣言」を発表した



みんなが笑顔で暮らせる社会を目指し、2017年に発表したマーク

# SDGsアクション かながわ

神奈川県内では、SDGsが採択される前から、持続可能な社会実現のために多くの優れた活動が行われてきました。数ある活動のなかから、17個の目標に関連する事例を紹介いたします。SDGsと聞くと、とすると遠い世界のことに感じてしまいがちですが、まずは県内にある身近な活動を知ることから始めてみましょう。

## 事例ページの構成



活動を代表するSDGs目標

個々の活動内容について詳しく知りたい人はぜひアクセスしてみよう！

目標どうしのつながりを可視化するため、関連する目標をハイライトしています。それぞれの活動とSDGsとの関係を複眼的にとらえる入り口としてお使いください。

※目標17は国連や政府、自治体との協働の場合




## 目標どうしのつながりを考えてみよう！

SDGsの17個の目標は互いにつながっています。次ページから紹介する活動は、それぞれ複数の目標と関連した活動を展開しています。以下の例を参考に、読者のみなさんもぜひ考えてみてください。

### 例1) 農スクール (p24)

-  1 貧困をなくそう 安定した職や収入のない状態の人に技能の習得と就職の機会を提供
-  4 質の高い教育をみんなに 持続可能な農業について現場で体験しながら学ぶ
-  2 飢餓をゼロに 安定した職や収入のない状態の人に食物を得る機会を提供
-  8 豊かになりつつ持続可能な成長を 農業の経験を積む機会を提供。参加者と全国の農業組織をマッチングし就労を支援
-  3 持続可能な健康をみんなに 農作業を通して精神的に健やかになる場を提供
-  10 人や国や地域間の公平を 働きたくても働けない人に対し、自立した生活を届けるためのプログラムを実施

### 例2) 横浜若葉台団地 (p30)

-  3 持続可能な健康をみんなに 入居者が健康的に暮らすための施設を団地内に設置
-  17 パートナーシップで目標を達成しよう 団地の再生促進に向け、産官学それぞれと連携
-  11 持続可能な都市とコミュニティ 多世代に向けた施設を集約、共有スペースやイベントなどで団地内の交流を増加

### 例3) 日本フードエコロジーセンター (p32)

-  2 飢餓をゼロに エコフィードで育った豚肉をブランド化し、市場価値を付加。養豚農家がよりよい環境で生産できるきっかけに
-  12 つくばない 廃棄予定だった食料を利用することで廃棄物の減少に貢献。契約企業へ工場に届いた廃棄食料の総量を伝え食料の過剰生産も抑制
-  3 持続可能な健康をみんなに 無駄な添加物を加えずに生産するエコフィードにより、健康的な豚肉の生産を支援
-  7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 食品廃棄物をバイオマスエネルギーの燃料として活用
-  13 気候変動に具体的な対策を 廃棄予定だった食料の焼却を防ぎCO2排出量の減少に貢献



## SDGsアクション⑩ かながわ 《生活協同組合ユーコープ》

### 余った食品を集めて 必要な人たちに渡す



## 貧困と食品ロス、2つの課題を解決するしくみ

「貧困をなくそう」と聞くと、日本から遠く離れた途上国が思い浮かぶかもしれない。しかし、日本でも国内の経済的な格差が広がっていて、食べ物に困っている家庭はたくさんある。

その一方で日々、日本中で大量の食品が捨てられているのも事実。食べきれなかった、商品の箱の角がわずかにつぶれた、野菜の形がいびつ……。まだ十分に食べられるものが、どんどん捨てられている。そこで、まだ食べられる食品は捨てずに必要な人に届けよう、という動きが始まっている。

生活協同組合ユーコープは近隣の生協など11団体とともにフードバンクかながわを設立。フードバンクかながわでは、配達直前にキャンセルされた商品や袋が破れたお米など賞味期限まで余裕がある食品を、食べ物に困っている人々を支援する団体に届けている。また、生協の組合員の家庭で眠っている常温保存の食品を“寄贈”として店舗に持ち寄ってもらい、フードバンクかながわに届ける「フードドライブ」という活動も始めた。

資源の有効活用や環境負荷の削減のために、食品ロスを減らすことが必要だ。食べ物に困る家庭も助けたい。「フードバンク」は人々の分かち合いを支えるしくみで、2つのマイナスを同時に解決しようとしている。



日本では、食べられるにもかかわらず廃棄される食品は年間で推計600万トン以上。ユーコープは、フードバンクや行政・社会福祉協議会を通じて、食べ物を必要とする人に届けている





## SDGsアクション⑩ かながわ 《よこすかなかながや》

# “ひとり”で過ごす子どもを ひとりでも少なく



## 登校前に朝ごはん、下校後は夕飯を

毎日ファストフードを食べていたり、食事を抜いたり、ひとりでごはんを食べる“孤食”をしたりする子どもが増えている。そうした子どもがひとりで来ても、あたたかく迎えてくれる「子ども食堂」が、いま全国に広がっている。

2015年にオープンしたよこすかなかながやもそのひとつ。当初は週3回、夕飯を提供していたけれど、2018年からは学校の授業のある日に朝ごはんも出すようになった。食材は近隣の人や農家、フードバンク(p10参照)などの寄付でまかない、ボランティアのスタッフが登校前と下校後の子どもたちのために、温かいごはんとおかずをつくって待っている。

空腹や栄養不足、孤独感は、体だけでなく精神面にも影響を及ぼす。子ども食堂に来て、たくさんの人たちと食卓を囲むことで、栄養不足が解消されるだけでなく、表情も明るくなっていく。

よこすかなかながや(横須賀なか長屋)の「なか」には①仲間、仲よし②おなかいっぱい③横須賀の真ん中の3つの意味がある。「子どもがいつでも『助けて』と言える居場所に」という想いも込められている。おなかと心がいっぱいになれば、自然と笑顔も生まれてくる。



(左頁)食堂は古民家を借りて改修したもの。改修費はクラウドファンディングで調達している  
(上)上級生から勉強を教えてもらったり、遠足に出かけたり、仲間たちとの活動も盛ん





## SDGsアクション⑩ かながわ

### 《湯河原リゾート ご縁の杜》

# 心身の活力を見つめ直し 健康寿命を延ばす宿



## 「ご縁」を大切に、人との交流を促す

人間の心身の状態は、「健康」と「病気」の2つに明確に分けられるのではない。健康と病気の間に変化する状態を「未病」という。神奈川県では、食生活の見直しや運動によって「健康」に近づけていくことを「未病改善」として推進している。

湯河原リゾート ご縁の杜は「ココロとカラダが整う宿」をコンセプトにした温泉宿。瞑想やメンタルセッション、日の出ツアー、自然界と対話する講座など、さまざまなプログラムが用意されている。日々の生活からいったん離れ、じっくりと自分の心身を見つめ直すことができるのだ。

ここでの食事は、動物性の食材を使用しないヴィーガン料理。卵や乳製品などを使わない野菜中心のメニューでデトックス効果をはかる。さまざまな講座やイベントも開催し、人と人をつなぎ、交流を生んでいる。そう、未病の改善には「人との交流」も欠かせないのだ。趣味や稽古事などの活動を楽しんでいる人のほうが、より自立度が高いというデータもある。

心や身体、食生活を整えることで活力が湧く。基本的なことだけれど、忙しい毎日のなかで見落としがちなことだ。人生100歳時代に突入するいま、ずっと健康に過ごすために日々の生活を見直してみてもどうだろうか。



〈左頁〉左上から、対話プログラム・出逢いと縁が深まる場、活力が高まるヴィーガン料理、館内に1,000冊以上あるさまざまなテーマの本、地球46億年を旅するウォーキングプログラム  
〈上〉生命力が高まる日の出ツアー



## SDGsアクション⑩ かながわ

## 《フリースペースたまりば》

# “受け入れられた”という 安心感が未来をつむぎ出す



## 誰もが自分らしくいられる居場所を

学校は子どもたちがのびのび学び、人間関係をつくる居場所。でも、いじめられたり、勉強についていけなかったり、さまざまな理由で学校に居場所をなくしてしまう子どもたちがいる。

そんな子どもたちが集まるのが、フリースペース「えん」。ドアを開けると、年齢も国籍もさまざまで、バラバラの個性を持った人たちがワイワイガヤガヤ。ここでは障がいの有無も関係ない。子どもたちの個性が、それぞれの“文化”として受け入れられている。

大切にしているのは日々の「暮らし」。決められたプログラムはなく、どう過ごすかは、自分で決めることができるのだ。自分らしくいられる場があることで、さまざまな事情や不安を抱えた子どもたちに、安心感が生まれていく。「えん」を運営するフリースペースたまりば代表の西野博之さんには、誰もが生きただけで祝福される場をつくりたいという想いがあり、「子どもたちには必ず何か光る部分がある」と信じている。

学校に行けないからといって、それで人生が決まるわけではないのだ。ここでの経験をきっかけに大学に進学したり、海外へ飛び出していった人も。一人ひとり誰もが、多様な未来をつかむ可能性を秘めている。



〈左頁〉「川崎市子ども夢パーク」内にあるフリースペース「えん」 〈上〉外には、自由につくり変えられる遊び場がある。夢パークへ来た子ども混ざって、一緒に遊ぶ(写真:濱津和貴)





## SDGsアクション100 かながわ

## 《 富士屋ホテル 》

年中無休の保育園で  
ホテルで働く女性を支える

## 不規則なシフトの仕事と子育ての両立を応援

“おもてなしのプロ”として、ホテルで働くことを選んだ女性たち。しかし、その職場は24時間365日、基本的に休みなく営業していて、しかも週末や連休ほど忙しい。出産後に仕事を続けたくても、不規則な勤務シフトのため子どもを預けられる保育園が見つからず、やむをえず退職する人も少なくない。

そこで、箱根の老舗である**富士屋ホテル**は、従業員が安心して子どもを預けて働けるよう、自社で富士屋ホテル保育園を開設した。年中無休で、開園時間は朝7時30分から夜8時30分までの13時間と長い。さらに、送り迎えの際の持ち物が少なく済むようにするなど、ホテルで働く母親が利用しやすい配慮が行き届いている。

もうひとつ注目なのは、この保育園が地域に開かれているということ。日本有数のリゾート地である箱根地域には、多数のホテルや旅館が存在する。富士屋ホテルの従業員だけでなく、そうした近隣の宿泊施設で働く人たちの子どもも受け入れているのだ。

ホテルのなかだけでなく地域全体に目を向け、子どもを育てながら働きやすい環境を整えることにより、女性の活躍をサポートしている。



## 年中無休

土日祝日や、ゴールデンウィーク、年末年始などの大型連休でも保育可能。



## 長時間保育

7:30～20:30の13時間の長時間保育に対応。遅い時間まで仕事がある人でも安心。



## 負担軽減

給食やおやつがあるので、お弁当の用意は不要。毎日のオムツやお昼寝用の布団も完備。

〈左頁〉子どもたちが一日楽しく過ごす園内は、いつも笑顔と元気な声に満ちている 〈上〉時間的な融通だけでなく持ち物などにも配慮し、働く母親にとって理想的な保育環境を実現



## SDGsアクション かながわ 《WOTA シャワーパッケージ》

# 限られた水でも 被災者を笑顔に



## AI制御で100ℓの水を繰り返し使えるシャワー

水道のない世界を想像できるだろうか。上下水道が通っていない場所は、世界中にあるし、降水量の減少による砂漠化も、あちこちで進んでいる。

**WOTA社**が開発したAI水循環システム「WOTA BOX」は、100ℓの水を繰り返し約100回のシャワーに使える浄水装置。最新のろ過器に通して真水に近いレベルにまで浄化する。AIで水質を管理することで、連続で1週間ほど使えて、メンテナンスも最小限だ。

WOTA BOXとシャワーテント、着替え用のテントがセットになっているのが「WOTAシャワーパッケージ」。配管工事が不要で、大人ふたりいれば、約10分で設営・設置できる、いわば“どこでもシャワー”だ。

このシャワーパッケージは、災害が起こったときにも活躍する。WOTA社は2016年の熊本地震を皮切りに、2018年の西日本豪雨や北海道胆振東部地震被災地の避難所に設置して入浴支援を始めた。衛生面の問題を抱え、心身ともにストレスでいっぱいの被災者に大歓迎された。

今後は、神奈川県と連携し、システムを改善しながら、県内の海岸などに実験的に置かれる予定だ。水リスクが高まると予測される未来において、非常時でも日常でも活躍する技術として注目されている。



WOTABOXとシャワーテント、着替え用のテントがセットになった「WOTAシャワーパッケージ」〈上〉北海道胆振東部地震で避難所となった、安平町安平公民館（仮）に設置された





## SDGsアクション⑩ かながわ

## 《 湘南電力 》

地域でつくった電気を  
地域で無駄なく使う

## 地元産のクリーンなエネルギーを使う暮らしへ

野菜や果物などは、採れたその場所で消費するほど無駄がない。遠い場所に運べば、その間に傷んだりして捨てる部分が出るからだ。

電気も同じで、つくった場所から遠くに送るほどロスが生じる。発電された地域で電気を消費すれば、エネルギーを最大限に無駄なく利用できる。ならば、電気も農産物のように、地域でできたものを地域で消費する「地産地消」ができればいい。それに取り組んでいるのが、地域密着型の電力会社である湘南電力。神奈川県内でつくられた電気を、地域内の企業や学校、一般家庭に供給している。

その電気は、太陽光や小規模水力、バイオマスなど、温室効果ガスを排出しない再生可能エネルギーによってつくられている。地域でつくられた電気を使う人が増えれば、クリーンなエネルギーの利用割合がそれだけ増えることになり、地球環境への負荷を減らすことができる。

いまの日本は、エネルギーの大半を海外から輸入した石油や石炭などの化石燃料に頼っている。その依存をやめることができれば、巨額の輸入費用も節約できる。地域産のエネルギーを地域で無駄なく使う。それは地域のみならず、日本中の人の暮らしを豊かにすることにもつながっていく。

## 湘南電力が起こす、4つのムーブメント



〈左頁〉電力の調達先のひとつ、小田原メガソーラー市民発電所 〈上〉湘南電力が推進する4つの動き。収益の一部を地域貢献活動に還元しているほか、電力を「選ぶ」楽しみも提供



## SDGsアクション⑩ かながわ

## 《 農スクール 》

働けずにいる人たちと  
働き手がない農業を結ぶ

## 農体験で働く喜びと自信を呼び覚ます

働きたいのに仕事に就けずにいる人や、働く意欲が持てず、引きこもり状態になっている人はたくさんいる。一方で、働き手がいなくて困っている農家がたくさんある。

両者をつ結びつけないのはもったいない。創設者のその思いから始まったのが**農スクール**。ホームレスや生活保護受給者、ニートの若者などが農業の基礎的な技能を学び、その世界で仕事に就くことをサポートしている。

“教室”は畑。青空の下で大地に触れ、汗を流しながら農作業する。自らの手で育てた野菜が立派に成長し、それを収穫するのは確かな手ごたえのある成功体験だ。「自分にはどうせ無理」と社会で生きることをあきらめていた人たちが、その体験によって自信を取り戻し、働く喜びを実感する。

これまで、スクールに参加した人の半数近くが、その後就労を果たしていて、さらにそのうち3割以上は農業の道に進んでいる。

働くことにつまずいてしまった人たちが、農業で働きがいを見つけ、自立のチャンスをつかむ。それを応援することで、高齢化などにより深刻な担い手不足にあえぐ日本の農業も元気になる。個人と社会、どちらの未来もよい方向に変えていくことができるのだ。



(左頁) 藤沢市内の農園で行われる農業体験。収穫した野菜を受講生たちが自ら料理してふるまう交流会なども実施 (上) 農スクールは福祉分野と一般就労をつなぐ役割を担っている



## SDGsアクション⑩ かながわ 《 湘南ロボケアセンター 》

# 身体機能のトレーニングに 最先端のロボットを



## 高度な技術を体感しながら楽しく歩行訓練

30年後の地球上には、人間よりロボットのほうが多くなっているとも言われる。ロボットはこれからの社会や産業、個人の生活を大きく変える。未来に向けて、その技術は目覚ましい進化を続けている。でも、そう言われてもあまりピンとこないのは、ロボットが身近で役立っているのを目にする機会がまだ少ないからかもしれない。

湘南ロボケアセンターは、ロボットを使用したトレーニングが受けられる施設だ。ここで使われているサイバーダイネ社の「HAL®」は、装着した人の意思に従って動く世界初のサイボーグ型ロボット。人が体を動かそうとしたときに、脳から筋肉に伝えられる「生体電位信号」を皮膚に貼ったセンサーで検出し、動きをアシストしてくれるのだ。事故や病気の後遺症で歩行が困難な人などが、ここでトレーニングにはげんでいる。

高度なロボットを、ただ開発するだけでは意味がない。それをサービスの形にして、ロボットによって生活上の課題を解決できること、楽に、楽しく暮らせることを多くの人に実感してもらう。それがロボット産業の成長を後押しする。技術革新は、その必要性を理解し応援する人が多いほど前進し、世界中の人たちの生活水準を向上させるものになり得るのだ。



〈左頁〉歩行動作をサポートする「HAL®」。超高齢社会で介護負担の軽減につながる技術としても注目されている 〈上〉専門のトレーナーの指導で立ち座りや歩行のトレーニングを行う







## SDGsアクション10 かながわ 《アール・ド・ヴィーヴル》

# 障がいのある人のアートを 対価をもらえる「仕事」に



## 得意なことで社会とつながり、自分らしく生きる

通りがかった人の足が思わずとまる個性豊かな絵画、彩りあふれる壁画、温かな色や線のイラストがデザインされた名刺や、パンチの効いた絵を大胆にあしらったステーションナリー。神奈川県のお店、オフィス、公共スペースに、アール・ド・ヴィーヴルから生まれたアートが潤いを与えている。

NPO法人アール・ド・ヴィーヴルは、さまざまな障がいのある人々が絵画やクラフトなどの表現活動を通して社会とつながり、自立することを支援する組織。ワークショップを行うだけでなく、就労継続支援B型事業所として、作品やそれぞれの個性を、きちんと対価がもらえる「仕事」につなげるサポートをしている。

活動の特長は、障がい者とその支援者が集う場所で作品をつくって終わりにしないこと。オフィスへの作品リースであれば、搬入・展示作業もほとんどを彼ら自身の手で行う。作品をモチーフにした名刺の受注制作サービスも立ち上げた。こうして表現活動を仕事にすれば、障がいのある人と社会とのつながりができる。目指しているのは、障がいのある人となない人がごくふつうに交わり、誰もが自分らしく生きられる社会だ。アートの力がそんな社会の実現を後押しする。



鮮やかな色遣いが楽しいクリアファイルやポチ袋、ノートや一筆箋。オーダーメイド名刺「つながるカード」の人気も高く、個人や企業、団体から多くの注文が寄せられている



## SDGsアクション⑩ かながわ

## 《 横浜若葉台団地 》

# 人々のつながり力で 世代が循環し続ける街に



## 若い世代の子育てを住民たちがサポート

少子高齢化が進み、街に活気がなくなっていく。すると若い人が街を出ていき、ますます少子高齢化が進む……。日本の各地でこの悪循環が起きている。住民数およそ14,000人、団地そのものがひとつの街のような**横浜若葉台団地**もそんなエリアのひとつだった。このままでは、人が住み続けられない団地になってしまう。そう気づいた住民や関係者が動き始めた。

この団地の強みは、大人数のコミュニティでありながら人々のつながりが強いこと。毎年欠かさず、花火大会や運動会といった数々の大きなイベントを住民の手で開催し、高齢者の見守りや清掃活動なども自治会をはじめとした住民組織が軸となって進めてきた。

団地ではこの「人々のつながり」と「規模の大きさ」を活かし、若い世代が子育てしやすい環境をつくろうとさまざまな試みを始めている。赤ちゃん連れの親が気兼ねなく過ごせるスペースづくりや一時預かりサービス、経験者による育児相談……。若い世代にとって魅力的な街をつくることで、自然に住民の世代が循環するサイクルを生み出そうとしているのだ。

高齢者も若い世代も住み続けられる場所を住民の力でつくる。この団地の挑戦は、高齢化が進む日本の街を変えるヒントになるかもしれない。



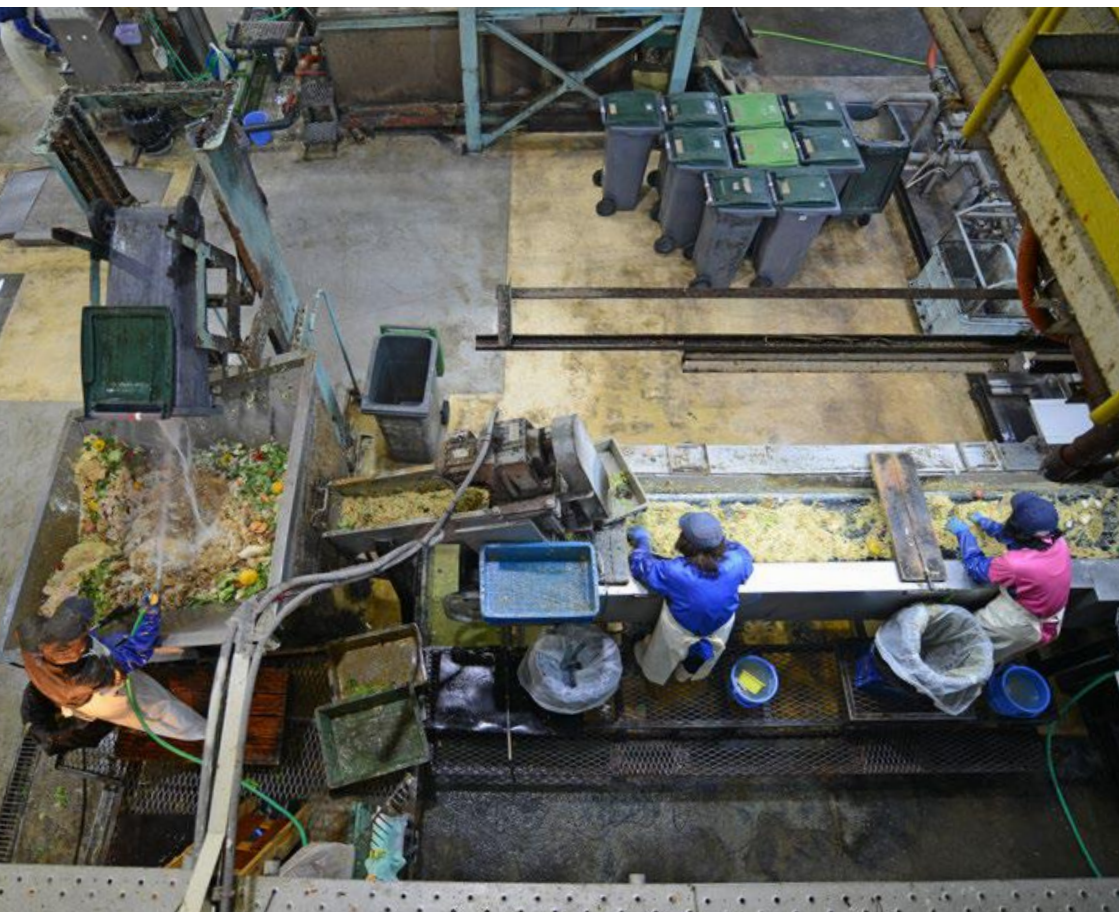
1979年に誕生した若葉台団地は、住民の半分近くが65歳以上の高齢者（日本全体の高齢化率は3割弱）。だが、名物の夏祭りには、団地内外から老若男女3万人が集まる





## SDGsアクション⑫ かながわ

## 《日本フードエコロジーセンター》

残ってしまった食べ物が  
他の誰かの役に立つ

## “もったいない食品”がブランド豚に変身？

私たちの食生活はスーパーやコンビニに支えられている。しかし日々の便利さの裏側で、多くの“もったいない食品”が出ていることを知っているだろうか？

「食品ロス」とは、まだ食べられるのに廃棄されてしまう食品のこと。日本では年間646万トンも発生し、これは世界中で飢えに苦しむ人に向けた食料援助量の約2倍に当たるのだ。

**日本フードエコロジーセンター**はそんな“もったいない食品”を有効利用し、食品の循環を実現する会社。食品ロスをリサイクルして、豚の飼料（エコフィード）づくりが行われている。

ここでは、近くの食品工場から出た製造ロスや、スーパー・コンビニなどで出た売れ残りを回収・選別し、80℃以上の熱で殺菌。そして独自の技術で発酵させて飼料にする。食品を焼却して捨てるよりもコストダウンになるため、エコフィードは養豚農家へ安く販売できる。

このエコフィードで育った豚は環境に優しく、やわらかな肉質の「ブランド豚肉」としてスーパーに並ぶ。あなたが今日、買い物をするスーパーにも並んでいるかもしれない。



〈左頁〉余った食品は工場に運ばれた後、異物の混入がないか、人の手でチェックされる  
〈上〉エコフィードは、関東近郊の15の養豚農家で使用されている





## SDGsアクション⑩ かながわ

 川崎キングスカイフロント  
東急REIホテル

 ホテルで使う電力を  
クリーンな方法で発電


## 温暖化に配慮した最先端のシステムを活用

「究極のエコカー」といわれる燃料電池自動車は、ガソリンではなく水素で走る。燃料電池は、電池といっても電気を蓄えるのではなく、自ら発電する装置だ。燃料の水素と酸素を反応させて電気を起こし、排出するのは水だけ。地球温暖化の原因となる二酸化炭素を出さずに発電できる。

燃料電池で走る車があるなら、燃料電池で部屋の灯りがつくホテルがあってもいい。大和ハウス工業が開発した川崎キングスカイフロント 東急REIホテルは、それを実現した“エコホテル”。施設全体の約3割の電気や熱を、燃料電池で発電した電力でまかなう。

そこで気になるのは、燃料となる水素はどうつくるのかということ。いま主流なのは、天然ガスや石油などの化石燃料から取り出す方法だが、その点でもこのホテルは新しい。使われる水素は、使用済みのプラスチックをリサイクルする過程で取り出されたもの。プラスチック由来の水素で発電した電力を活用するホテルは、ここが世界初だという。

東京国際空港にも近いこのホテルは、海外からの利用客も多く見込まれる。地球温暖化の問題に対して何ができるか。そのひとつの答えを体現しているこの場所は、それを広く知らしめる役割も果たしていくはずだ。



〈左頁〉水素は昭和電工のプラスチックリサイクルプラントからパイプラインで供給される  
 〈上〉右手前が導入された東芝製の純水素燃料電池。わずか5分弱で発電を開始できる

★もっと知りたい!

 川崎キングスカイフロント 東急 REI ホテル (川崎市)  
<https://www.tokyuhotels.co.jp/kawasaki-r/>




## SDGsアクション⑩ かながわ

### 《 真鶴魚つき保安林 》

# 魚を呼び寄せる森林を 未来へ継承



## 豊かな漁場をつくる「お林」を未来に引き継ぐ

「お林」。真鶴半島の先端部に、地域の人たちが畏敬と親しみをこめてそう呼ぶ森林がある。江戸時代に幕府の命で一帯にマツが植えられたのを始まりとするこのお林は、古くから地域の漁業を支える役割を担ってきた。

森林が漁業を支える？ そう、自然の森林から自然の海岸線へとつながる一体性が、夜間の暗がりをつくり、豊かな魚礁をつくる。そのように、魚の生育にいい影響をもたらすことから、伐採が禁止または制限されている海岸林を「魚つき保安林」といい、**真鶴のお林**もその指定を受けている。

大切なお林を守るため、これまで真鶴町では松くい虫の被害拡大を防ぐための薬剤の散布などを行ってきたが、いよいよ本格的な保全プロジェクトを始動させた。まずはお林の“健康診断”として、木々の1本1本を調べる綿密な現状調査を実施。その結果をもとに、専門家のアドバイスを受けながら、お林を守っていく具体的な方法について話し合いを進めている。

地域の神聖な場所であり、先人から大切に受け継がれてきたお林を守ることは、真鶴の豊かな海を守ることでもある。たくさんの魚が泳ぐ海にするために、陸の上でもできること、すべきことがある。ひとつつながりの自然として、森林と海を同時に守り育て、未来へと引き継いでいく。



（左頁）戦後までは一般の人が立ち入ることのできない皇室御料林だった。現在は神奈川県立真鶴半島自然公園となっている（上）のべ367人のボランティアが協力し、植生と木々の成長を調査



## SDGsアクション15 かながわ

## 《 あざおね社中 》

# 生きものがにぎわう里山を 若者たちの手で取り戻す



## 生物多様性豊かで持続可能な暮らしをつくる

「里山」では、農業や林業、炭焼き、養蚕など、その土地の生態系に溶け込んだ生業や生活によって資源やエネルギーが循環する。沢や水路、田畑、森林やカヤ原などの土地を人が切り拓き、利用することによって、多様な生態系が保たれてきた。しかし、経済開発による生業や生活の変化は、都会への人の移動と土地利用の変化を加速させた。休耕地や荒れた森林が増え、生きものの多様さも損なわれた。

山梨県との県境にある青根地区もそうした地域のひとつ。その青根で、生物多様性のモニタリング調査や環境教育(ESD)に取り組んでいるグループが、麻布大学の学生を中心とした市民グループ**あざおね社中**だ。青根の生物多様性の実態や変化を知るために、地域の植物分布や里山に特有な生物の生息地を調べてマップをつくったり、子どもたちのための自然観察会を行ったり、水源林やススキ原の整備をしたりと、活動は多岐にわたる。

あざおね社中の特徴は、青根の外に住む人が地域の自治会や小学校など多くの関係者・当事者と連携し、里山の手入れを通じて、青根の持続可能なまちづくりに参画していること。休耕地を復活させた水田を拠点とする若者たちの活動は、里山に生きものと人々のにぎわいを取り戻す力になる。



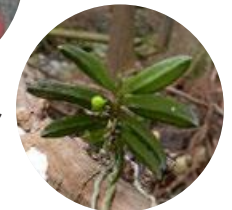
カヤネズミ  
(提供:青木雄司氏)



アカハライモリ



カヤラン



青根は県営水道の72%を供給する相模川水系の水源地のひとつ。カヤネズミやアカハライモリ、カヤランなど、里山の豊かさを示す生きものや、県のレッドデータリストに載る生きものなどが暮らす





## SDGsアクション⑩ かながわ

### 《 国際平和映像祭 》

# 平和への想いと行動を 映像の力で呼び起こす



- 1 『Children of the Forest』(中国)
- 2 『from Lesvos』(日本)
- 3 『FROM WARLESS PLACE』(日本)
- 4 『「記憶の解凍」：カラー化写真で時を刻み、息づきはじめるヒロシマ』(日本)
- 5 『音楽を平和の武器に | When words fail, music speaks』(イラク)

## 考えるきっかけをくれる多彩な作品を上映

「平和をテーマに5分以内の映像をつくってください」。そんな募集に対して、自分ならどんなものをつくるだろうかと、まずは想像してほしい。

実際に応募された作品が上映されるイベントがある。毎年9月21日の国際平和の日(ピースデー)に合わせ、横浜で開催されている**国際平和映像祭(UFPFF)**だ。作品は世界中の誰もが応募でき、フィクション、ノンフィクション、アニメ、CGなど表現方法は何でもありだ。

森林の神を崇拝する中国の少数民族。ギリシャの島に打ち捨てられた大量の救命胴衣。あるいは一見ありふれた日本人女性の日常。このイベントで目にする映像は、「平和」というキーワードから漠然と想像されるものとは少し違っているかもしれない。

戦争や紛争にまつわることだけではなく、家族との時間、人とのつながりなど、人が映像を通して表現しようとする「平和」は実にさまざま。平和とはそもそも何なのか。いったいどんな状態を平和と呼び、何があればそれが実現するのか。このイベントに参加した人たちは、おのずとそのことに思いをはせる。回を重ねるごとに、そんな人たちが増えていくことが、平和のための現実的なしくみをつくる力になっていく。



(左頁)2018年のグランプリ作品(1)ほか各賞受賞作。広島の高中生らによる作品(4)も(上)多数の参加者で盛り上がる会場。参加者同士がつながる貴重な機会でもある



## SDGsアクション⑩ かながわ

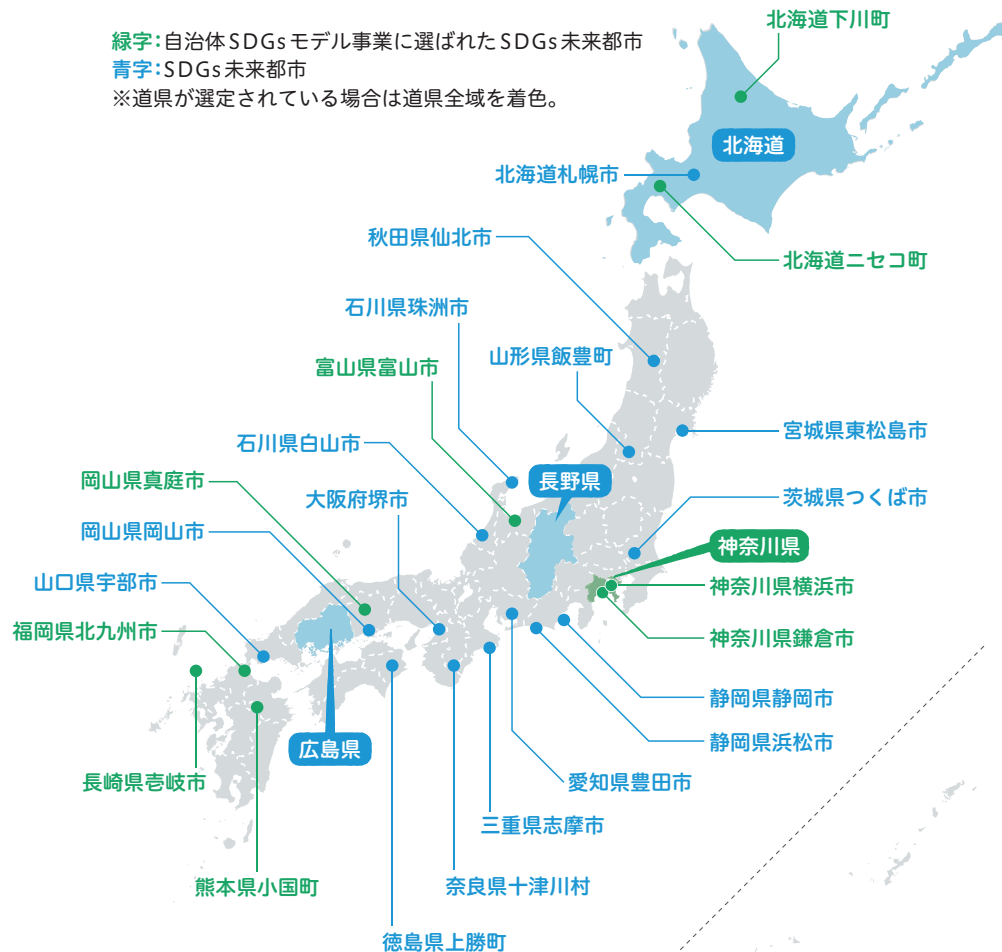
### 《SDGs未来都市》

# SDGsで地方創生を 推進する政策

緑字:自治体SDGsモデル事業に選ばれたSDGs未来都市

青字:SDGs未来都市

※道県が選定されている場合は道県全域を着色。



## 国と自治体との連携が、SDGsの達成を後押し

SDGsを達成するために、世界中のNPOやNGO団体、企業、行政などが、試行錯誤しながら活動している。日本の各自治体は地域ならではの課題も抱えている。複雑に絡み合う社会課題をきれいに解決するには、それぞれの努力だけでなく、お互いの協力が必要だ。

日本では、政府が2016年に「SDGs推進本部」を立ち上げた。SDGsの達成のために「SDGsアクションプラン」をつくり、多くの団体や企業との連携を始めている。その政策のひとつが**SDGs未来都市**だ。

SDGsの達成に向けたさまざまな取り組みを自治体に向けて公募し、そのなかでも優れた取り組みを提案した29都市を「SDGs未来都市」に選出。さらに、先導的な10都市のプランを「自治体SDGsモデル事業」に定めて、補助金を支出する。資金の一部を政府が負担することで、事業モデルの推進を助けるというしくみだ。

神奈川県は横浜市、鎌倉市とともに未来都市とモデル事業に選定された。国と自治体がパートナーシップを結び、自治体はNPOや企業と連携してプランを実現させる。そんな輪がどんどん広がれば、活動はより活性化する。あなたも県民、市民としてその輪に入って活動してみよう。



〈左頁〉全国の「SDGs未来都市」。未来に続くまちづくりが期待される 〈上〉2019年1月30日、パシフィコ横浜で開催された「SDGs全国フォーラム」で「SDGs日本モデル」宣言が発表された

1 貧困をなくそう

2 質の高い教育をみんなに

3 健康と長寿をみんなに

4 働きがいも、学習も未来のために

5 ジェンダー平等を実現しよう

6 安全な水とトイレを世界中に

7 持続可能なエネルギーを

8 働きがいも、経済成長も

9 産業と雇用革新を加速しよう

10 人や国を問わず豊かになろう

11 住み続けられるまちづくりを

12 つぶや消費、つくりかた

13 気候変動に具体的な対策を

14 海の豊かさを守ろう

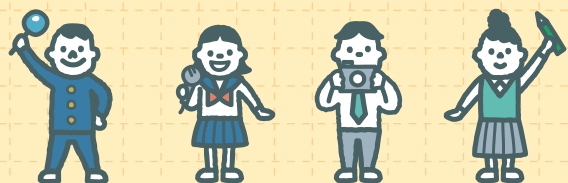
15 陸の豊かさも守ろう

16 平和と公正をすべての人に

17 パートナーシップで目標を達成しよう



# 中高生による SDGsアクション・レポート



本冊子をつくること自体が「目標4：質の高い教育をみんなに」に貢献できるよう、2030年に社会人として未来を担う世代である中高生が担当するページをつくりました。県内の中学校・高等学校から希望校を募り、3校の生徒さんたちが地域の企業や団体の活動取材してくれました。

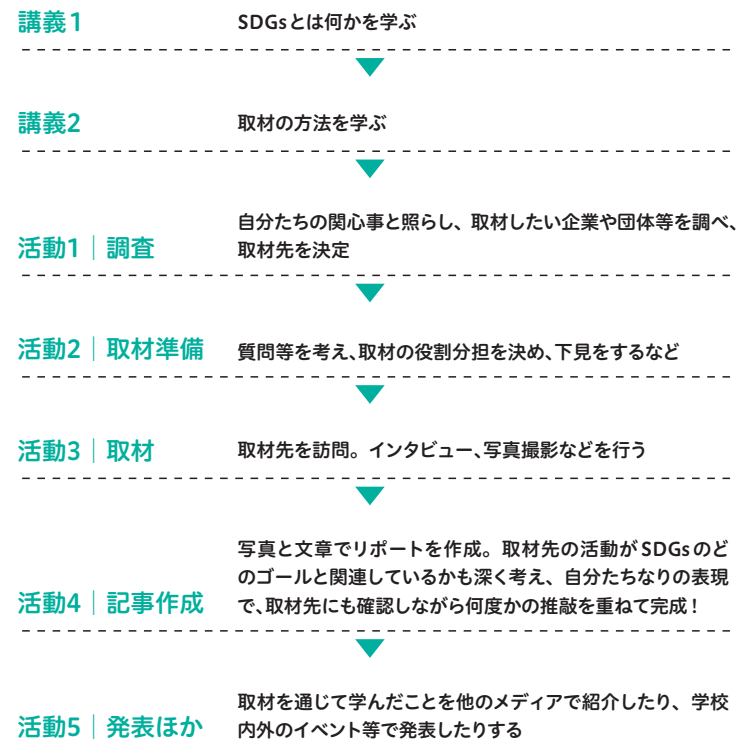
## 《参加校》

神奈川県立有馬高等学校

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

湘南学園中学校高等学校

次ページからの取材記事は、  
以下のような学びのプロセスを経てつくられました。



中高生が取材活動を通じて、地域の社会課題と向き合いながら活動する大人たちと出会ったことで、冊子制作という目的を越えて、取材先企業や団体と継続的につながって新しい活動が生まれるきっかけともなりました。リアルな社会と触れることが学びにつながり、どんどん成長していく生徒たちの姿がとても頼もしく感じられました。

(協力:SDGs for School)

# 大川印刷



取材・写真：神奈川県立有馬高等学校 SDGsプロジェクトチーム

## 大川印刷とSDGsのかかわり

大川印刷がSDGsの活動を知ったきっかけは、社長の大川哲郎さんが出席した国際サステナブル会議でした。その会議以降、大川印刷はSDGsを経営計画に加えて会社の仕事にすることを決めました。

2030年までにSDGsの17のゴールに辿りつかなければ、人々が生きにくくなる世界になってしまうので、CSR（企業の社会的責任）の活動で得たものを効率よく生かしつつ、自分たちの活動をビジネスにつなげながら17の目標を達成するために社員全員で力をひとつにしています。

そのため2005年に自社を社会的印刷会社（ソーシャル・プリンティング・カンパニー）と定義し、環境印刷として3つの柱を立てて事業を進めています。取り組みとして、自社の年間CO<sub>2</sub>排出量をあらかじめカットする「ゼロカーボンプリント」、石油系溶剤を1%未満に抑えた「ノンVOCインキ」とFSC®森林認証紙の使用を推進し、環境印刷を行っています。

また、ゴール達成のために取り組んできたなかでも、特に製造業としての成果を残しています。8番の目標「働きがいも経済成長も」に沿って、「若者カフェ」を設置し若者の定着率向上や採用に関するプロジェクトを進めています。さらに、13番の目標「気候変動に具体的な対策を」の達成にも大きく貢献しています。カーボン・オフセットに取り組み、「エコプロ2017～環境とエネルギーの未来展」で、奨励賞に選出されています。



大川印刷は1881（明治14）年、横浜で創業し、主に、医療品・食品関係の印刷を行っている



今回取材に応じてくださった、宝来智明さん、草間綾さん、佐藤禎則さん(左から)。工場見学後のインタビューでは、高校生の視点からの質問に対して快く答えていただいた



全社員参加の経営企画ワークショップでSDGsを中長期戦略に取り入れている(写真提供:大川印刷)



2018年度SDGs経営計画のなかで立ち上がった「若者カフェ」。さまざまな学校法人や企業などがブース出展し、生徒さんたちと対話している様子(写真提供:大川印刷)



工場内部の様子。ここでさまざまな印刷を行う。見学では活版印刷の体験も行っている。活版に塗料を塗って印刷するという昔ながらの方法を楽しめる

## 大川印刷工場見学

創立137年となる大川印刷では、毎週水曜日に工場見学が実施されています(要予約)。まず、大川印刷のSDGsに対する活動、地域・社会貢献、社会の課題解決に向けた講義を受けられます。次に、環境に配慮した工場や製品、品質向上への取り組みについて、それぞれの機械に取り付けてあるSDGsのパネルを見ながら説明を受けられます。最後に、1960年代に活躍した「手フット印刷機」で印刷を体験でき、自分で印刷したものを持ち帰ることができます。昔ながらの印刷技術の素晴らしさを直に感じることができ、とてもよい経験となりました。

大川印刷では、いたるところにSDGsの17の目標をクリアするための工夫が凝らされていました。たとえば、工場にある機械に貼られているパネルには、SDGsの17の目標のどの目標に特化した機械なのかが分かりやすく表示されています。それらを表示することにより、社員の意識も高

まるため、とてもよい活動だと感じました。

大川印刷のような企業が増えていくことでSDGsの17の目標のクリアに近づくと思うので、これからの大川印刷の活動に期待していきたいと思います。



印刷された用紙を一度に数千枚裁断できる機械。実際に消費者の手元に届く商品のパッケージに使われる用紙をつくっているため、SDGsの目標の12番「つくる責任つかう責任」につながっている

2018年8月には子どもたちを対象に「学びにおいでよ！SDGs工場見学ツアー」を行った(写真提供:大川印刷)



## わたしたちにできること SDGsを広めたい

大川印刷は、2017年から経営計画にSDGsを組み込み、さまざまな活動を行っています。取材前は具体的な想像ができなかった私たちが、どういった取り組みがSDGsへつながるのか、また、どのように会社全体でSDGsについて考え、行動するのか、取材を通して理解を深めることができました。そして、もっと多くの会社に、このようなとても素晴らしい取り組みについて興味を持ってほしいと感じました。私たち高校生も、もっとSDGsに関する取り組みを盛んにしていきたいです。

取材チーム:秋山璃緒 金子雅希 川島京子 川野玲菜 木藤あつり 木俣 憩 草山美海 柳田麻衣 櫻井そのか 長島夕女 長谷川莉愛 松倉広夢 山崎七海



# 面白法人カヤック



取材・写真：横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校 KAMA魂 6 ALL STARS

## 「つながるまち」鎌倉

「人とつながるまち、鎌倉」。これが、面白法人カヤックの目指している地域像です。「地域特有の自然や文化などの資本を元にしながら、“つながり”を軸にしてそれを増やしていこう」。この考え方を、カヤックでは「地域資本主義」と呼んでいます。この「地域資本主義」を進めることで、まちの価値を高め、大きくしていくことができれば、結果的にそれは、「住み続けられるまちづくり」につながります。

日本でも有数の観光地である鎌倉には、もともと「地域資本」がたくさんあります。また、その資本と資本が「つながる」ことで、さらなる進化を遂げる可能性があるまちです。

鎌倉に住む人は、「鎌倉というまちが好き」という意識を持つ人が比較的多いのではないかと感じます。カヤックでも、人々のそのような「想い」に着目して、さまざまな立場の人がかかわりを持てるようにする、言い換えれば「人と人のつながり」「人とまちのつながり」をつくり出そうとするさまざまなプロジェクトに取り組んでいます。そしてそれは、多くの人が地域づくりに参加し、地域を愛する人々による持続可能なまちづくりが行われるきっかけとなっています。

さまざまな「つながり」を活かして結びつき、「住みたいまち」をともに創り出していく。カヤックのような取り組みが、これからの未来を豊かにするひとつの方法なのではないでしょうか。



「まち全体がぼくらのオフィスです」というコンセプトを掲げ、御成通り周辺にカヤックのオフィスが点在する。「まちとオフィスをつなげる」という発想から、オフィス内の床もアスファルト敷きで、道路から直接入れるなどの工夫がされていた



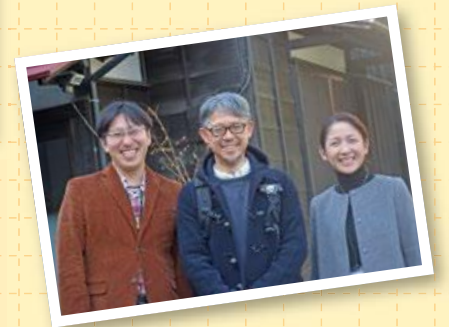
(写真提供:カヤック)



カヤックは古民家も積極的にオフィスとして活用している。古民家をそのまま買い取ることで、景観を保存するとともに、土地が細分化されてしまうのを防ぎたいという想いがある



古民家オフィスを活用して、会議などができるスペースとしている。古民家オフィスには、ほどよく光が差し込み、心地よく、充実した取材の時間となった。取材では、カヤックの山下浩史さん、佐藤純一さん、伊藤雅子さん(左から)にお話を伺った



## 鎌倉を「全力応援」

カヤックは具体的にどんな活動に取り組んでいるのでしょうか。「まちの社員食堂」は、まちで働く人が手軽に食事を楽しめる場として2018年にオープンしました。鎌倉にある約40のお店が週替わりで、ランチタイムとディナータイムに、健康的でおいしい食事をふるまっています。

鎌倉には多くの人が観光に訪れます。その一方で、地元で働く人が気軽に食事をとれる場所は少ないのが現状です。この取り組みの核は、働く人同士が「つながる」場をつくることです。「つながり」をつくることで、より「鎌倉ライフ」を充実したものにしてほしい、という願いが込められています。実際に協力している味噌屋inoueさんは、この取り組みで、お客さんとの「輪」が広がったと語っています。商品を提供する際に何気ない会話が生まれ、「笑顔」につながる。私たちは、「笑顔」こそが、「つながり」が生まれている証拠だと考えました。

また、まちをよくしていくアイデアをつくり出していく場があります。それが「カマコン」です。鎌倉に住む人をはじめとして、全国から学生・お年寄りなど、多様な年代の人が集まり、「まちをよりよくするために」という視点からさまざまな提案がされています。



この日のキッチンには、まちの社員食堂の店長(左)と並んで、その週のコラボ店である「定食屋しゃもじ」の店長(右)が立っていた

まちの社員食堂では、加盟する企業が週替わりでメニューを提供する。鎌倉で働く人たちがつながり、「自然と笑顔になれる」空間だ。「鎌倉で働く人を支援する」というコンセプトのもと、鎌倉で働く人にターゲットを絞った食堂となっている



ここで発想を広げるために行われるのが「カマコン式ブレスト」という手法です。参加者は「結論を出す」のではなく、自由に、多くアイデアを出し合います。「どんなにぶっ飛んだ考えでもよい。思いついたアイデアはすべて言う」。この寛容なルールのもと、考えを集めていきます。また、「それ、いいね」と共感することを大切にしています。こうして、事象を自分の身に起きていることとして考えていきます。これをカマコンでは「ジブンゴト化」と呼んでいます。会場の全員が、鎌倉を「ジブンゴト化」して考える熱気に触れると、知らず知らずのうちに参加者は<sup>とろこ</sup>虜になってしま<sup>う</sup>のです。



プレゼンを聞き、実現に向けたアイデアを出し合うカマコン。大切にしていることは「共感」と「ジブンゴト化」である



会が終わっても、いたるところで話し合いは続く。私たちも、会が終わってからもずっと話し合いを続けてしまい、知らず知らずのうちに問題を「ジブンゴト化」していた

## わたしたちにできること「ジブンゴト化」をするには？

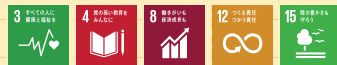
「ジブンゴト化」。今回の取材活動で、とても印象に残った言葉のひとつです。では、「ジブンゴト化」のために、中学生はどんなことができるのでしょうか。私たちは、「経験」することが大切だと気づきました。



今回の取材で、私たちは多くの人と「つながる」ことができました。そして、たくさん話し合いの「場」を知り、このような形で「伝える」ことができました。頭で考えるだけではなく、たくさん「経験」をしていくことで、鎌倉に対する想いも強くなっていきました。これからも、多くの「経験」を積み、何事も「ジブンゴト化」していくことを大切にしていきたいです。

取材チーム：青野大洋 伊藤大知 河合康生 倉持聖和 平野 央 森岡 楓

# 湘南食育ラボ



取材・写真：湘南学園中学校高等学校 アクションブック制作チーム

## 食べ物の味がわかる人間になってほしい。 湘南学園の生徒が好きだから。

今回私たちは [NPO 法人湘南食育ラボ](#)の方々にお話を伺いました。この団体は湘南学園生の保護者の方々が作ったNPO法人で、学校内の食堂「湘南学園カフェテリア」の運営を行っています。企業が入らない学食はめずらしく、そこにはさまざまな苦労があったようです。

もともと、2013年の湘南学園創立80周年記念の際に「学食をつくろう」という話から始まり、せっかくなのだから本気で「食育」をやろう」となり湘南食育ラボができました。また、保護者と教職員が協力しながら法人運営を行っている湘南学園の特色にも合う形を考えて、NPO法人にしたのだそうです。

## 安心安全とおいしさ

こだわりを聞いてみると、「お米とお野菜」と即答でした。お米は栃木県からわざわざ仕入れた、ネオニコチノイド系農薬不使用のお米を使用しています。副理事長自ら援農にも行き、土手づくりもすべて手作業で行い、前年度のお米の様子を見て、必要であれば土の移動も行うほどのこだわりようを体感してきたそうです。これほどのこだわりのお米なので普通よりも高額になってしまいますが、営業形態や理念を考慮し通常より安く提供してもらっているそうです。



湘南食育ラボの理事長 小田拓也さん  
副理事長 川井登喜子さん(左) 原田ゆう子さん(右)



僕たちのインタビューに熱い想いで  
応えてくれました。この想いをしっ  
かり届けたい、そう強く感じました



こちらは学年ランチの様子です。  
毎日のランチだけでなく家庭科と  
のクラブや同窓会の会場など、さ  
まざまな場面でカフェテリアは利  
用されています

野菜に関しては一部を地元の農家さんから仕入れ「地産地消」を目指しています。その農家さんとは平塚に畑を持つ、[株式会社いかす\(iCas\)](http://www.icas.jp)さんです。今回はiCasの代表取締役の白土卓志さんにもお話を伺いました。

iCasさんは自然本来の力を使って、生産者・消費者・社会・地球、みんなに優しい野菜づくりを目指し、無農薬・無肥料での栽培などいままでの農業の概念を覆すようなことをたくさんされています。そんな、素晴らしい野菜を提供してくださっている背景には、白土さんと湘南食育ラボの「安心安全でおいしい野菜を、生徒に食べてもらいたい」という熱い想いがありました。この想いのおかげで私たちはいま、カフェテリアで「安心安全でおいしい野菜」を食べることができます。



「いかす平塚圃場」に実際に行ってきました。豊かな土壌づくりのために30センチもの厚さで敷かれたチップの上を歩くと、ふかふかしていて気持ちよかったです！



はじめて生で食べたブロッコリー!!



白土卓志さん(左)と「畑のプリンス」と、うちーさん(内田達也さん)。畑の話なのに人生論に聞こえてきました

## えらぶ ~50年後の笑顔のために~

そんなラボのみなさんの願いは「みんなに食の大事さを学んでもらうこと」だと言います。

大人になると自分で自分の食べ物を選ばなければなりません。迷わずにいまの自分に何が必要なのか判断できることが大切です。そしてそれを下の代にも伝えられるようになってほしい。湘南学園のみんなには「持続可能な未来のための食育」を通し、食の大切さに生徒一人ひとりが気づけるようになってもらいたいそうです。

ラボのみなさんはこのように強い想いを持って活動してこられたので、今後は生徒考案メニューなどをつくって、生徒も一体となってラボの活動を盛り上げていきたいと思います。

## わたしたちにできること SDGsはチャンスだ

5年前に新設されたカフェテリア。当たり前のように自分たちの日常に溶け込み、カフェテリアの運営に携わる人たちの想いに触れる機会はありませんでした。その価値をわかっていなかったのです。

しかし、今回の取材で食育ラボのみなさんの熱い想いに触れ、感謝の念に駆られるとともに、この想いがあまり学園生に知られていないという現状にもどかしさを覚えました。iCasさんの取り組みも含めて、とてもこの紙面だけでは伝えきれません。同時にこの取材は、身近なものに目を向け、その価値を考えるよい機会となりました。次は自分たちがまわりの生徒たちに伝えていく番なのかもしれません。

まさに「SDGsはチャンス、契機なのだ」と。

取材チーム：(高校)大木まは奈 高野優太郎 田中楽人 宮澤明日実 村上真都  
(中学)高山隼 田口玲 武田智生 中村玲玉 堀恭輔 横山鋭徳



# もっと学びたい人へ

この冊子を読んでSDGsをもっと学び、行動したくなったらアクセスしてみよう！

## 本



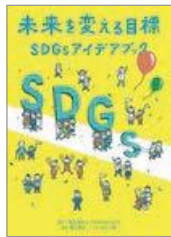
小学校中学年～

### 知っていますか？ SDGs

制作協力：公益財団法人日本ユニセフ協会 発行：さ・え・ら書房



SDGsがどうしても自分ごとになりづらい。そんなふうを感じている人には、この本がぴったり。ユニセフの活動をもとに、社会課題に直面している人々の姿をとらえた写真とともに、17個の目標について解説。さらに、課題に対して行動を起こしている人の活動にも触れている。



中学生～

### 未来を変える目標 SDGsアイデアブック

編著・発行：一般社団法人Think the Earth 監修：蟹江憲史



SDGsの教材を学びの場に届け、先生や生徒を応援するプロジェクト「SDGs for School」の一環でつくられたビジュアルブック。本冊子の姉妹版であり、同様の構成で世界34の事例を紹介している。アイデアに満ちた国内外の活動に触発されること間違いなし！



中学生～

### 基本解説 そうだったのか。SDGs

編集・発行：一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク



169個のターゲットと232個の指標についても詳しく知りたいという人は、ぜひこの冊子を手にとってほしい。専門家による目標の意義や、関連する社会課題の現状なども読むことができる。さらに、日本の状況に重ねたレポートもあり、本格的にSDGsを学びたい人へおすすめの一冊。



社会人～

### SDGsの基礎

編集・発行：事業構想大学院大学 出版部



SDGsの成り立ちをはじめ、行政、企業、NPOなどがどのようにSDGsを活用すればよいのか、環境省やNPO、研究者など異なる立場の専門家の解説をまとめた一冊。巻末には、169個のターゲットが掲載されている。SDGsへの取り組み方に迷う社会人の必読本。

## ウェブサイト

### かながわのSDGsへの取り組み

▶ <http://www.pref.kanagawa.jp/docs/r5k/sdgs/2030.html>

神奈川県SDGsに関する取り組みをまとめているサイト。「SDGs未来都市計画」「かながわSDGs取組方針」などにアクセスできるほか、県民が参加できるキャンペーン、イベントなどの情報も。



### 国連SDGs公式サイト

▶ <https://www.un.org/sustainabledevelopment/> (英語)

世界全体のSDGsについての取り組みの入り口となるサイト。テキスト、動画、SNSなどさまざまなメディアを通じて最新情報が発信されている。



### 国連持続可能な開発・ナレッジプラットフォーム

▶ <https://sustainabledevelopment.un.org/sdgs/> (英語)

採択時の目標、ターゲット、指標についての公式文書を原文で読むことができるほか、目標達成に向けた進捗状況も、毎年更新されている。



### 国連広報センターSDGsページ

▶ <http://www.unic.or.jp>

SDGsのことを日本語で知りたいと思ったら、まずはここにアクセスしよう。17個のロゴがダウンロードでき、授業で使いやすい日本語の映像を集めたページもある。



### 国連大学と知るSDGs

▶ <https://jp.unu.edu/explore/>

国連大学に所属する研究者とその研究内容を17個の目標に紐づけて紹介している。関連する記事や出版物も載り、情報が豊富。より専門的な分野まで掘り下げて学びたい人向け。



### グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン (GCNJ)

▶ <http://ungcnj.org/sdgs/>

SDGs達成には企業との協働は欠かせない。その促進を日本で担うのがGCNJだ。企業の担当者へのインタビューを読むと、多様な取り組みが始まっていることに気づかされる。



### SDGs. TV

▶ <https://sdgs.tv>

SDGsに関する世界各国・地域から集められた短編映像を視聴できるプラットフォームメディア。映像ならではの気づきや共感をベースに、学びと行動のためのツールとして活用できる。







## 「SDGs日本モデル」宣言

私たち自治体は、人口減少・超高齢化など社会的課題の解決と持続可能な地域づくりに向けて、企業・団体、学校・研究機関、住民などとの官民連携を進め、日本の「SDGsモデル」を世界に発信します。

- 1 SDGsを共通目標に、自治体間の連携を進めるとともに、地域における官民連携によるパートナーシップを主導し、地域に活力と豊かさを創出します。
- 2 SDGsの達成に向けて、社会的投資の拡大や革新的技術の導入など、民間ビジネスの力を積極的に活用し、地域が直面する課題解決に取り組みます。
- 3 誰もが笑顔あふれる社会に向けて、次世代との対話やジェンダー平等の実現などによって、住民が主役となるSDGsの推進を目指します。

賛同自治体(93自治体 2019年1月30日現在)

北海道 北海道札幌市 北海道二セコ町 北海道下川町 岩手県 宮城県 宮城県東松島市 秋田県 秋田県仙北市 山形県 山形県飯豊町 福島県 茨城県 茨城県つくば市 栃木県 群馬県 埼玉県 さいたま市 埼玉県越谷市 千葉県 千葉市 東京都 神奈川県 横浜市 川崎市 相模原市 横須賀市 平塚市 鎌倉市 藤沢市 小田原市 茅ヶ崎市 逗子市 三浦市 秦野市 厚木市 大和市 伊勢原市 海老名市 座間市 南足柄市 綾瀬市 葉山町 寒川町 大磯町 二宮町 中井町 大井町 松田町 山北町 開成町 箱根町 真鶴町 湯河原町 愛川町 清川村 富山県 富山県富山市 石川県 石川県珠洲市 石川県白山市 福井県 福井県鯖江市 山梨県 長野県 岐阜県 静岡県 静岡県静岡市 静岡県浜松市 愛知県豊田市 三重県志摩市 滋賀県 京都府 大阪府堺市 奈良県十津川村 和歌山県 鳥取県 島根県 岡山県岡山市 岡山県真庭市 広島県 山口県 山口県宇部市 徳島県 徳島県上勝町 香川県 福岡県 福岡県北九州市 長崎県 長崎県壱岐市 熊本県小国町 鹿児島県 沖縄県

「SDGs日本モデル」宣言は、2019年1月30日に横浜で開催された「SDGs全国フォーラム2019」で93自治体の賛同により発表されました。持続可能な地域づくりに向けて、「パートナーシップ」を軸にSDGsに地域主体で取り組むことを宣言しています。

### SDGsアクションブックかながわ PDF版

2019年3月31日 初版発行

編著  
一般社団法人Think the Earth

編集ディレクター  
上田壮一

編集  
松本麻美

執筆  
江口絵理(p11,29,31,39) 佐藤恵菜(p3-7,13,21,43)  
佐藤由佳(p15,17,33) 堀江令子(p19,23,25,27,35,37,41)

写真  
ページごとに記載 ※特に記載がない写真は各団体から提供されたものです

アートディレクター  
武田英志

デザイン  
阿知波花恵 中村衣里

SDGs for School事務局  
笹尾実和子

協力  
川廷昌弘

中高生レポート指導  
有馬高校/青木祐樹 北島寛明 竹内美里 半澤ゆかり 森本 段 山本純平  
鎌倉中学/戸沼雄介 和田雅広  
湘南学園/小倉知子 小林勇輔 末廣友里 山田美奈都 吉川謙太郎

制作  
SPACEPORT Inc.

発行元  
神奈川県  
神奈川県政策局 政策部 総合政策課  
電話:045-285-0908(直通)

©2019 神奈川県  
※教育以外の目的での本冊子の無断転載・複製を禁じます。



# SDGs アクションブック かながわ

本冊子のPDFデータ  
をダウンロード  
できます！



私たち一人ひとりの行動が、  
未来につながる。  
SDGs 未来都市 神奈川県

お問い合わせ  
神奈川県 政策局 政策部 総合政策課  
TEL 045-285-0908 (直通)  
神奈川県のSDGsに関するホームページ▶

